

Ⅳ 各モデル地域・モデル校の実践報告【角田地区】

実践報告

1

角田市立桜小学校

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善

(1) 実践概要

本校は、令和3年度に「共に学ぶ教育推進モデル事業」に取り組むにあたり、校内研究の視点にユニバーサルデザイン（以下「UD」とする）を取り入れ、算数科の授業づくりについて研究を行ってきた。通常学級の中には、発達障害の特性があったり、学び方に特徴があったりする児童も一斉に授業を受けている。これまでも支援が必要な児童に対しては、柔軟な対応や様々なサポートを行ってきた。そのサポートを学級全体に広げることにより、支援が必要な児童だけでなく、どの児童にとっても学びやすい環境、分かりやすい授業になることを目指して研究を進めてきた。また、北角田中学校区の小・中学校で「UDの授業づくり」という共通の視点で校内研究に取り組み、その考え方を市内へ広め、実践につなげていくことを目指した。

◆キーワード◆ ユニバーサルデザインの授業づくり、児童理解、小・中連携

2 令和3年度の実践の概要

主な取組	(1) 専門家チームの訪問研修会（授業実践と事後検討会） (2) UDの共通理解
成果	(1) 専門家チームに授業を参観していただき、児童の特性や指導の仕方について指導いただき、その後の授業実践に役立てることができた。 【UDの視点】の成果 焦点化…本時のねらい、発問や児童に提示する情報を絞ることで、児童が意識や思考を焦点化しながら学習活動に取り組むことができた。 視覚化…思考や言語などの情報を、絵や写真、図、動作などに変換し、視覚的に提示することで理解しやすくなった。 共有化…意図的にペアで話し合う場面を位置付け、自他の考えを伝え合いながら学習を展開することで、学習内容の理解につながった。 (2) 黄先生による「UDの考え方を踏まえた授業づくり」の講義によって、UDに対する理解が深まった。
課題点	・児童の実態を把握し、それに応じたUDの視点を授業づくりに生かす。 ・小中連携の点から北角田中学校区において、互いの授業を参観する機会を設け、「UDの授業づくり」についての理解を深める。

3 令和4年度の取組の概要

主な取組	<p>(1) 専門家チームの訪問研修会（授業実践と事後検討会）</p> <p>(2) 北角田中学校区での授業参観・事後検討会への参加</p>
成果	<p>(1) 第1回目の訪問研修会の際に、今後授業を行う4年生と5年生の児童の様子を見ていただき、その後に担任と話合う機会を設けた。学級の様子や支援が必要な児童の実態から専門家チームにUDの取り入れ方等のアドバイスをもらうことができた。</p> <p>【UDの視点】の成果</p> <p>焦点化…授業のねらいや活動を絞り、1時間の授業で何を教えるか、内容を焦点化し、授業構成をシンプルにする。</p> <p>視覚化…効果的に視覚情報（電子黒板で拡大する、実物を提示する、必要に応じて色を変える）を用いたことで、児童のつまづきを支援することができた。</p> <p>共有化…ペアやグループで互いの考えを伝え合ったり確認し合ったりすることで、理解が進んでいる児童にとっては自分の考えを深める機会に、困っている児童にとっては、自分の考えの不足分を補う機会となった。</p> <p>(2) 北角田中学校区の学校で訪問研修会がある際には、互いに授業参観・事後検討会へ参加し、UDの視点から意見交換を行うことができた。</p>
課題点	<ul style="list-style-type: none"> ・UDの視点の手立てを考える際には、児童の実態把握とアセスメントによる裏付けが必要であり、認知特性の面からの見方を深めることが必要。 ・授業での目標達成にUDの視点が有効であったのか検証を進める。 ・北角田中学校区、市内へ研究を広げる。

4 令和5年度の取組（まとめ）

指導目標	<p>校内研究とリンクさせ、研究主題である『『分かる・できる』を実感しながら、『確かな学力』を身に付けていく児童の育成』を目指す。</p>
指導目標に対する主な手立て	<p>【授業づくりの視点1】児童が主体的に学習に取り組むための工夫</p> <p>問題の解決に向けて見通しをもち、粘り強く取り組んだり、問題解決の過程を振り返り、新たな問いを見出したりする。</p> <p>【授業づくりの視点2】UDの視点を取り入れた授業改善</p> <p>UDの視点を授業の中に取り入れることで、「全員が参加できる授業」につなげる。参加しやすい環境と、児童の特性に応じた指導として、「授業のUD化モデル」（明星大学 小貫悟氏）における「参加」「理解」の階層の指導方法を参考に手立てを考え、授業改善に取り組んだ。</p> <p>以下に授業実践とその成果と課題点を示す。</p>

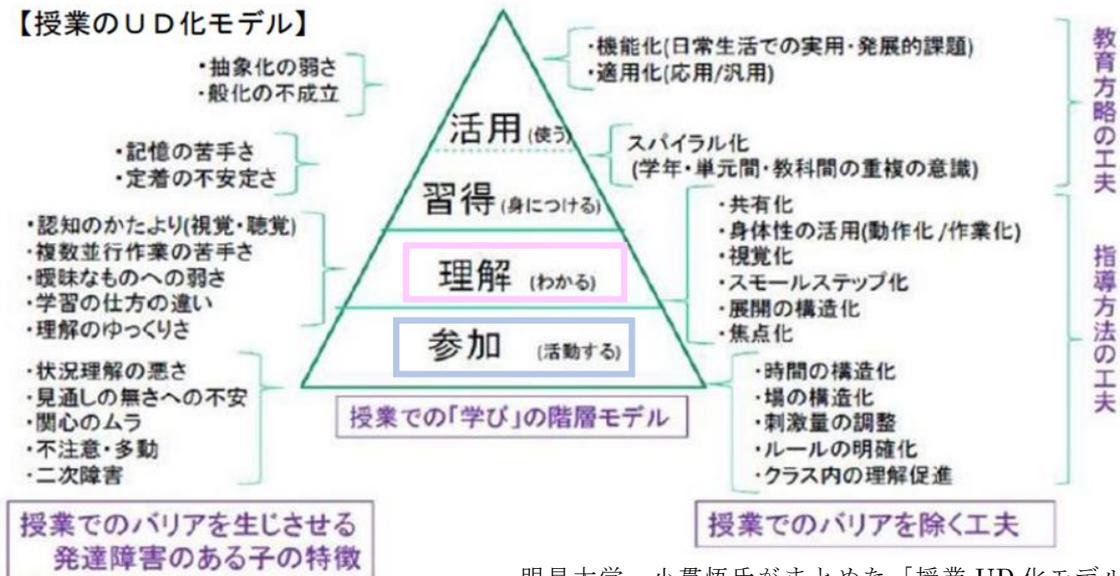
<p>経過</p>	<p>(1) 第1回授業実践及び授業検討会【6月】 提供授業：4学年 算数科「角の大きさ」「○：成果、●：改善策」 【視点2】ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善 ○授業全体を見たときに、分かりやすく整理され、環境も整っていた。 ○対象児の集中が持続できる時間で活動が区切られていた。 ●算数が苦手な児童の特性として応用ができない、ワーキングメモリーが低い等のために、間違いを直しても同じようにまた間違えるということがある。やり方がいくつもあると混乱してしまうので、そのことを考慮して授業を組み立てていく。</p> <p>(2) 第2回授業実践及び授業検討会【9月】 提供授業：3学年 算数科「わり算を考えよう」 【視点2】ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善 ○文章問題では言葉のおさえやイメージが共通であることを確かめながら進めていく必要があり、視覚化はその点で有効であった。 ●児童によってつまずきの場面が違っているので、児童によって手立てや支援を変える。UDL（学びのユニバーサルデザイン）の授業のように、児童に多様な学びの方法を自分で選択することも必要になる。</p> <p>(3) 第3回授業実践及び授業検討会【10月】 提供授業：2学年 算数科「新しい計算のしかたを考えよう」 【視点2】ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善 ○スモールステップで学習を進めることで大半の児童は理解できていたが、対象児はより細やかな段階が必要だった。 ●授業実践での解決手段は「おはじき操作」であったが、「おはじき操作」での理解が難しいのであれば、手段を変えていく。児童に、おはじき以外の解決方法を示したり、選ばせたりと多様な解決方法を準備していく必要がある。</p>
<p>成果</p>	<p>児童の特性を把握することやUDに対する理解が深まり、普段の授業や学級経営に生かすことができた。これもUDという共通の視点で研究を行ってきた成果と言える。また、児童にとってもUDの視点を取り入れた授業は分かりやすく、学習内容の理解が深まることも分かった。</p>
<p>課題点</p>	<p>児童の特性は多種多様であり、画一的にこうすれば良いというものはない。児童の実態を的確に見取り、児童の特性に関する専門的な知識と見立てが必要である。今後もUDや特別支援教育について学び続けていくとともに、協働による授業づくりを通して実践を積み重ねていく。今後、北角田中学校区ではこのようなUDの具体的な手立てを共有できるような体制づくりが課題である。</p>

5 角田市立桜小学校におけるユニバーサルデザインの授業づくりの手立て

・本校のUDの手立て

専門家チームからのアドバイスや実践の積み重ねから本校のUDの手立てをまとめた。参加の段階では、「授業への参加の促進」、理解の段階では、「授業の組み立て」と「分かりやすい説明」の3点を設定し、授業づくりの手立てとした。それぞれに具体例を挙げ、児童の実態やそこから考えられるつまずき、授業のねらいの達成に考慮して、授業に取り入れた。(以下 授業のUD化モデル)

【授業のUD化モデル】



明星大学 小貫悟氏がまとめた「授業UD化モデル」

⇒授業のUD化モデルの階層では、参加 (活動する)・理解 (わかる) の部分を中心に行っていく。

理解 (わかる)

授業の組み立て

教材から児童の意識が離れないように、集中しやすい多様な学習活動を工夫する。

(例)

- 本時に身に付けさせたい力に焦点化する。【**焦点化**】
- ねらいに合わせたシンプルな構成にする。【**展開の構造化**】
- 体験や作業を通して思考を深める。【**身体性の活用**】
- 自力→ペア・グループ→斉などの形を取り入れ、学び合う場を設定する。【**共有化**】
- 早く進む児童を考慮した活動を設定する。【**個人差への配慮**】

分かりやすい説明

指示・説明は、言葉だけでなく視覚的にも提示し、内容を明確に示す。

(例)

- 色分けを工夫した板書、絵や写真の掲示、ジェスチャー等の視覚的・操作的な手がかりを入れる。【**視覚化**】
- ワークシートと板書が同じになるようにする。【**視覚化**】
- 何をすればよいか、明確に分かる発問をする。

児童の実態に沿って何のために行うのか、目的に応じて活用する

参加 (活動する)

参加の促進

できそうだなと思えるように、個人差に合う教材教具の提示や、学びやすい環境を工夫する。負担を軽減し、自信をもたせる。

(例)

- 教室環境【**場の構造化**】【**刺激量の調整**】
- 認め支え合う学級づくり
- 多様な解決方法の中から選んで学習できるようにする。【**選択制**】
- 個別の補助教材や教具を工夫する。
- スモールステップ化する。【**スモールステップ化**】
- 量や回数を、個に合わせて調整する。
- 手掛かりを示したり、解決の見通しをもたせたりしてから、自力解決できるようにする。
- 既習事項の掲示・確認

6 「共に学ぶ教育推進モデル事業」について

(1) ユニバーサルデザインによる授業づくり

ユニバーサルデザインを取り入れた授業実践事例について

専門家チームの指導から、「参加」「理解」の段階での児童のつまづきを想定した「一斉指導の工夫」「一斉指導の中での配慮」にUDの視点を取り入れてきた。また、配慮が必要な児童を支援するために、全学年の算数にT.Tを取り入れ、担任と共通理解を図りながら指導に当たった。UDの授業については、その有効性を数値化して検証することはできないが、児童の様子や授業者の実感・手応え、参観者の意見等から「有効である」と捉えている。今後も「UDの授業づくり」を計画的・継続的に実践していく中で、手立ての工夫やその成果が増えていくと考える。

(2) 小学校、中学校、高等学校、教育委員会の連携体制構築

教職員、地域への特別支援教育に関する理解啓発について

この事業に取り組むにあたり、北角田中学校区の小・中学校の校内研究の視点にUDを取り入れた。訪問研修会の際は互いに授業参観、事後検討会に参加し、小・中学校で授業改善を行ってきた。共通の視点で研究に取り組むことによって、事後検討会では、UDの視点に関する意見や指摘が多く挙がった。このことから同じ視点で取り組むことの良さとその成果が分かる。小中連携に関しても、学習指導面において中学校への円滑な接続につながるという点でUDは効果があるものと感じる。課題面としては、3年間の積み重ねを継続していくために、小・中学校と教育委員会等で連携し、体制を整えていく必要がある。

(3) 研修会やケース会による児童生徒理解

外部専門家による知見の生かし方について

3年間継続して研究に取り組んだことによって、教師側の意識の変化が成果の一つとして挙げられる。講義や専門家チームからの研究授業毎の指導や助言によって、UDに対する考え方や授業への生かし方、児童一人一人の認知特性について学ぶことができた。授業を積み重ねていく中で、児童の実態に対する手立てや方法が多様となり、教師の対応の幅も広がっている。また、訪問研修会の際は、近隣校に研修会への参加を募り、多数の参加を得たことで、市内における「UDの授業づくり」推進のきっかけづくりにつながった。

<総評>

第Ⅲ期は、一貫して算数を研究対象とした。算数という抽象度の高い教科の学習においてはより一層一人一人の「わかる」「できる」に配慮が必要と考えられる。設問の意図をめぐって、児童との間でイメージを共有できているかということがいつも話題になったように思う。あいまいで抽象的な事柄を共有するための具体化の過程にユニバーサルデザインの手法が大いに役立っていた。

この3年間の取組全体を振り返ると、研究が進むにつれ選択肢の多様性にも配慮されるようになり、児童生徒の参加の意欲をさらに高めたと見受けられる。子どもたちがより適切な手段や表現方法を選ぶことができるよう日ごろから手段と成果とを行き来したフィードバックが望ましい。

その子なりの成功体験が「自分にもできそう」という自己効力感の醸成につながっていく。ユニバーサルデザインの教育は、診断前・未診断支援の意味をもつと言われている。子どもたちや保護者がこれらの工夫を何らかの形で知る機会があれば、前向きな自身の自己理解や保護者のわが子理解が図られるものとする。

(臨床心理士 片瀬道先生)